



大手前大学の挑戦

— ユニット自由選択制®から
インターナショナルリベラルアーツカレッジへ —

大手前大学 学長 柏木隆雄



1. 開学の精神

筑摩書房のPR雑誌『ちくま』に鹿島茂が3年越しに連載している「神田神保町書肆街考」は、そのタイトルにあるとおり神田に軒を連ねる主要な書肆の盛衰が辿られているが、東京大学や大学予備門、のちの第一高等学校などが、もともと神田エリアに建てられていたのが、明治17年それらが本郷地区に移転したあと、明治13年から明治22年にかけての10年間ほどに、中央大学、法政大学、明治大学などの前身となる私立の法律専門学校が次々と創立されて、古書街、学生街と化したという。

そうした私立の学校の創立の理由や経緯はいろいろながら、自身の理想や日本の将来を見据えた創立者たちが、同志を集め、東京のみならず地方から上京して新しい西洋流の学問を習得することによって自己の理想の達成を願う学生たちを育てていった。鹿島はその道筋を各大学の大学史や創立100年記念誌などによって詳しく跡付けている。

彼ら創立者たちの多くが、幕末維新の際に遠く海外に留学して人文科学や自然科学の知識を得、帰朝してのち、その知識を広く活かすためにも子弟の教育が喫緊の事業と考えたに違いない。それぞれ経営の辛酸を舐めながら奮闘した姿が、鹿島茂の文章の背後から浮かび上がってくる。

それは維新の動乱が落ち着き、黒船とともに新しい風を巻き起こした西洋の学問が、これからの国の針路を大きく変えることを敏感に悟った先覚者たちが、自らの資財を投げ、知力を尽くして学校経営にあたったことを示すだろう。福沢諭吉の『福翁自伝』は、そうした気概と時代の風潮を如実に示すものだ。上野に立てこもった幕府の反恭順派の侍たちを攻撃する官軍の大砲の響きの中、慶応義塾の新銭座の教室で、諭吉が泰然と英書で経済を講じて動じなかったという話は、学問の独立と自由の本義を語っていて深い感銘を禁じ得ない。

維新から明治にかけての建学の熱気は、太平洋戦争後、圧倒的な米英との力の差から招いた敗戦の荒廃と虚脱の中から再び巻き起こる。もちろんGHQの指導になる学制改革の波の

名から新制大学として国立公立の学校の多くが生まれ出たが、それらとは別に、戦争中の教育の反省から、あるいは新しい理想を抱いて自ら大学を創立する者が相次ぐことになった。

そうした時代の必要性を機敏に感じた一人に、大手前学園を創立した藤井健造がいる。大学卒業の後、地元新聞の記者としてオリンピックのロサンゼルス大会を取材、その後ヒッチハイクでアメリカ大陸横断を試みるなど活躍した藤井健造は、折からの日中戦争に応召して新聞社を退社、中国戦線を戦ったあと、終戦時には情報将校として大阪城内の中中部軍司令部報道部に勤務、終戦後連絡事務局と名称が変わってからもそこで復員業務にあたった。

その藤井が軍国日本の象徴的建物である大手前の陸軍偕行社跡に、女子教育の学校を設立することを決意したのは、後に彼が「終戦後の混乱した社会から新しい日本の進むべき道考えた多くの心ある人々の中の最も小さい存在の一人として、女子の教育こそ将来の日本を再興する根本であり、希望であると考えた」（昭和28年10月短大設立の辞）と語るとおり、時代の趨勢を鑑み、教育のもつ重さ、男女軽重のあまりにバランスの崩れた日本を痛感した結果だろう。かつて福沢諭吉に封建の「門閥制度は親の仇でござる」と言い放たせたのと同じヒューマニスティックな動機が、女子教育を目指す藤井の胸を焦がしたに違いない。

はやくも昭和21年4月に大手前文化学院として大阪府の指定を受け一部開校にこぎつけた後、翌22年正式に藤井は学院の理事長として就任、精力的にその教育の根幹を充実していった。英語専科、英文タイプ、英会話さらには洋裁、調理実習といった科目は多くの子女の要請に応えるものとなる。この時期に学んだ学生の中から後の短期大学の教授となる者が輩出したのも、草創の期の教育が充実していたことを示していよう。

折しも文部省が学校教育法を改正、昭和25年4月から暫定的な措置として短期大学の設置を決めたのを受け、藤井は文化学院と合わせて短期大学の設置を企図、精力的にその準備に取り組んで、昭和26年4月大手前短期大学が開学する。Study for life（生涯教育）を学園の精神とし、Sic itur ad astra カクテ星二至ラム（かくて不朽の名をなさん、と敷衍される福井秀加の愛唱句）のヴェルギウス『アエネアース』の詩句を践む道が作られることになる。

2. 大手前女子大学の創立から大手前大学へ

文化学院は順調に発展し、服飾科、教職科を擁する短期大学も新しく大手前の地に校舎も新築して、学生数も昭和29年に266名であったものが、昭和37年には556名に達し、その出身地も北海道から沖縄にわたる盛況であった。この頃、先に西宮の文化人として戦前から知られていた福井秀加の岳父福井治平が昭和25年に文化教育を目指して自らの別荘地に開学させた学校法人西宮学園を土地、建物ともに藤井との約束に基づいて大手前大学

に寄付したことにより、これを短期大学の阪神分校とすることになった。しかしやがて女子教育の充実という観点からも、その敷地に4年制女子大学を設立する構想が生まれ、再び藤井健造はそのために東奔西走することになった。大手前の地に学院と短期大学を経営しつつ、新たな4年制大学の開学は大きな負担を強いるものであったに違いないが、すでに短大の英語教員として活躍していた長女福井秀加の協力、さらに文部省の設置委員会の委員たちの適切なアドバイスも得て、文学部英米文学科、哲学(美学)2学科を擁する女子大学として昭和41年4月に開校した。後に史学科を開設して3学科となるが、開学の最も象徴的な事柄は、昭和42年11月に三笠宮殿下の台臨を仰いで開学式を行ったことだろう。殿下は古代オリエント学の泰斗であり、初代学長中村直勝博士の友人でもあった。

その中村博士を始め大手前女子大学の布陣は史学、文学、哲学ともに関西の碩学が並んで、理事長藤井健造の大学にかける気概が伝わってくる。以後中村直勝学長の逝去後数年理事長が学長を兼任した期を除いて、日比野丈夫(東洋史)、米山俊直(文化人類学)、川本皓嗣(アメリカ文学・比較文学)と、私の場合はしばらく措き、それぞれ学界に重きをなす碩学がその後を継ぎ、教授陣の先頭に立って教学の充実に力を注ぐことになるのも、藤井健造を緒として歴代理事長の学問への尊宗の現れに他なるまい。

昭和46年に日本で初めてとなる「アングロノルマン研究所」(現在の交流文化研究所)を、その10年後に「史学研究所」を学内に立ち上げたのも、そうした研究重視の姿勢に重なるものだが、それには昭和51年から理事となった福井秀加教授の力が与って大きい。福井教授は、英語からその源流となる中世アングロノルマン語へと研究を発展させ、パリ大学にも学んで、国際学会にも出席、多くの貴重な文献を渉猟、購入することによって日本におけるアングロノルマンのパイオニアの一人として活躍、アングロノルマン研究所をその基盤として充実させ、その資料の見学に専門家がしばしば訪れることになった。

史学研究所は元来国史、東洋史の碩学が相次いで大学の教員となり、大手前短期大学の敷地となる大阪城三の丸の遺跡発掘、また寄託を受けた伊賀神戸藩主本多家文書など歴史的貴重文献の解読、分析などを手掛ける中心としてその存在は大学の中核の一つと目されるに至り、現在においても近隣の古墳発掘の調査も加わり、いっそうその重要性を高めている。

日本の高度成長期に合わせるように、学院、短期大学、大学ともに発展し、短期大学は昭和61年伊丹に新校舎を建築して移転、福井秀加が学長に就き、その5年後、逝去した藤井理事長の後を受けて理事長に就任、「日本文化学科」の増設や安藤忠雄設計による大手前アートセンターを建設するが、平成7年1月の阪神・淡路大震災により本部校舎が倒壊、彼女の指揮下、教職員、学生的一致団結の下、翌年4月という早さで



▲ 阪神・淡路大震災で倒壊した夙川キャンパス

奇跡的な復興を遂げたことは「大手前ルネッサンス」として語り継がれることになる。翌 8 年、大学院文学研究科を開設して、名実ともに阪神の有力な文系大学としての体制が整った。

3. リベラル・アーツ型大学教育

福井秀加理事長のもっとも大きな仕事は、西暦 2000 年（平成 12 年）を期して女子大を男女共学の大手前大学として新たに発展の基礎を築いたことだろう。建学者藤井健造は、終戦後の荒廃から立ち上がるには女子教育の実践と深化の必要性を痛感して、短期大学、大学と立ち上げたが、女子に特化した教育体制は、高度成長を経た時代の趨勢に合わなくなり、男女ともに学ぶことがいっそう大学の活性化を促すとして、男女共学に切り替えることになった。

従来路線の転換について、賛否の議論がなされたに違いない。それを押し切ったの英断は、大学案内のポスターの斬新なイメージにきっぱりと示されている。「男女驚愕！」「男女共楽！」。いずれもそれらの文字の真ん中に「共学」の文字が白抜きではめ込まれて、その斬新なデザインが効を奏したか、共学路線への転換はみごとに成功し、2 学科だった大手前女子大学は、人間環境学科、社会情報学科の 2 学科を擁する社会文化学部（伊丹キャンパス）を増設して大手前大学として発足した。以来現在にいたるまで、大手前大学の姿勢は、社会の動向に敏感に、また学生のニーズ、社会のニーズを的確に把握しつつ、常に「改革」、「改善」の姿勢を取り続けることによって、建学以来の学是、Study for life の精神を発揚する。

この新しい取り組みに重要な役割を果たしたのは、福井秀加理事長の長男の福井有副理事長だ。『米国の大学経営戦略』（学法文化センター）などの編著もある彼は、祖父の初代理事長の膝下に育ってその薫陶を得、留学から帰ってからは母理事長の傍らにあって大学経営の実際を学び、平成 17 年理事長に就任するや、大学経営に優れた手腕を発揮して、大胆な施策を次々と実行に移した。

その第一が、短期大学の総合移転計画である。祖父藤井建造から実行委員長を任された副理事長の福井有は、伊丹市の高等教育誘致施策に立候補するや、地元との交渉、文部科学省への報告相談、そして建築計画と、率先して事に当たり総合移転を成し遂げた。

同時に、当時相互に関連をもっていなかった四年制大学と短期大学の授業を統一、時代に即した概念としての「STUDY FOR LIFE」を提案し、CI（コーポレートアイデンティティ）に基づいた手法でロゴマークを設定、後に「最も成功した大学の CI 計画」と称されることになる。

第二に、社会文化学部の設置と男女共学化が挙げられよう。社会文化学部の募集状況は、初の本学の共学化ということもあり、定員（200 名）の 8 倍近い募集人数を集めた。さらに

新入生は男子学生が6割、女子学生が4割という結果は、共学化が初年度からスムーズに進行したことの証しである。

大学は男女共学となってからさらに充実を図って、2学部5学科から総合文化、メディア・芸術、現代社会の3つの学部3学科に発展し、そこには観光やマンガ・アニメーション、ビジネス・起業といった従来の大学の枠に入らない、しかし時代の有力な文化的価値のある学科目が並ぶ。福井は絹川正吉元 I.C.U 学長の大学教育論（『大学教育のエクセレンスとガバナンス』、高等教育情報センター、2006）に大いに共鳴し、自身もアメリカに学んだこともあって、いわゆるリベラル・アーツ型の教育が日本にまだ十分に根付いていないことを思い、大手前大学の理想の教育をリベラル・アーツに置いた。「3学部クロス・オーバー」は、教養科目と専門科目の区別をなくし、専門的な知識を教養として学ぶ方式に転換するまことに大胆な改革であった。

入学してくる学生に「社会人基礎力」をつけさせ、彼らが自ら「創る専門性」を育むリベラル・アーツ・カレッジ、これを学生本位の視点で教職員が一体化して取り組む。そのために学内のFD活動を活発にし、昨年から本格的に実施された教員間の授業見学は、一定の期間を設けて教員同士が授業を相互に見学してレポートを作成、それを見学した教員に送って、受け取った教員にコメントがあればそれを記して返す。これらのレポートは集積してどの教員も閲覧して参考に供することができる。

また学生の授業アンケートも実施、学生の出席率も考慮した質問項目を設けて、授業の理解度を尋ねるとともに、授業を通して自分のどの能力が進んだかを問うことで、学生の自覚を促し、自由記述欄を設けて学生の率直な意見を汲み取る素材とした。学生の能力開発についてはアメリカ合衆国アルバーノ大学を範として、さらに新しいアイデアを盛り込んだ C-PLATS を策定、Creativity, Presentation, Logical Thinking, Artsitic Sense, Teamwork, Self-control を基幹とする10の能力を涵養する教育も一昨年から本格的に取り組んでいる。

さらに教員の組織として C-PLATS 委員会を立ち上げ、教員の関心に基づいて、各能力の発展させる教育方法を実践報告を交えて討議、シラバス上に各教科を学ぶことによって、C-PLATS の略語で示されたどの能力が伸展するかを各教員が記すことが義務づけられるとともに、能力開発型教育への移行が全学的に認知されるようにした。

こうして多様な分野を幅広く学び、その過程で批判的思考力や課題発見・解決能力の育成を図って、絹川正吉のいう「学習能力の肝要と健全で思慮深い判断力の育成」というリベラル・カレッジの理想へと着実に踏み出すことになった。1年、2年で必修の「キャリア・デザイン」科目は、コア・リーダーの策定するプログラムを担当の全教員が行い、15課あるうち、2回は学長の講話が入る。そしてその成果は全学生の参加するプレゼンテーション大会で披露され、各クラス、各ゼミから選抜された代表学生による最終プレゼンテーション大会で各学年の優秀者が決定されて表彰されることで、学生たちの発表能力は目を見張る成果を見せた。

特筆すべきは、近隣の一般企業人や卒業生からなる100名に及ぶ教育ボランティアの活

用が、大学の活性化に大きな力となっていることだ。全学プレゼンテーション大会に至る過程においても最終の大会においても、教育ボランティアのアドバイスがきわめて有効に働き、同時に大手前大学の存在も強く印象づける役割を果たしている。

4. グローバルな大学へ

大手前大学は開学の藤井健造初代理事長以来、英語教育を柱に大きく成長してきた。初期の短大には、フランス人教師がフランス刺繍やフランス語を教えて学生たちに深い印象を与えている。それは共学制になっても変わることはない。短大と大学に共通に開かれているLEO (Langage Education Otemae・英語実践プログラム)は、ネイティブの教員による英語のみの授業で、社会人の受講も認めてレベル100からレベル400まで少人数クラスを多数揃え、在学生の登録者は全学生の4割にも上る。

その実績を背景に、2012年9月からグローバル・ジャパン・スタディーズ(GJS)が立ち上げられた。コースの全科目を英語で講義するプログラムは2013年4月から本格的に開始され、日本ビジネスや日本文化論、マンガ・アニメーション、音楽、さらに観光、スイーツといった分野も英語で学ぶことができる。

海外の交流提携の大学もアメリカ合衆国やフランス、韓国、中国におよび、さらにフィリピンの大学とも連携協定が結ばれることになった。ルイ14世が設立して以来、世界でもっとも高名なパリ国立高等美術学校との交換留学制度の成立は、日本における総合大学として最初の例として成功が期待され、大学創立50周年を迎える2016年には、現在のメジャー制(ホスピタリティー・マネジメント、建築・インテリア、造形美術、ファッションビジネス、マンガ・アニメーションなど20に近いプログラム)とリベラル・アーツコア教育、情報活用力、教職教育、その他総合教育系科目などをさらに充実した形での改変を行って、いよいよリベラル・アーツ・カレッジとしての本領を発揮することになる。

大手前大学は、こうして3代にわたる理事長の強いリーダーシップの下、常に挑戦する大学として、教育界での位置を確かにし、その使命を果たしてきた。今後もいっそうその努力を続けてさらなる飛躍を期したい。

さくら夙川キャンパス ▶

